宋代大史獨斷新纂

四

義太夫獨習新書四の巻

淨瑠理文意之起因抄拔

花飛び蝶驚けども人愁へず

此の序詞、三體詩に載せたる陸龜蒙が鄴宮を詠ぜし詩に依れる由、難波みやげにもいへり

其の詩は

花飛蝶驚不レ愁レ人　水殿雲廊別置レ春

曉日靚粧千騎女　白櫻桃下紫綸巾

三千の容色

白樂天が長恨歌の中に、後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一、とあるが本にて、三躰詩に篩能が吳姬を題にて、自是三千第一名、内家叢裏獨分明、などもあり

二月中旬ふりを獻ずる榮花なり

これも三躰詩に、題華清宮　王建

酒幔高樓一百家　宮前楊柳寺前花
内園分得温湯水　二月中旬獻瓜

とある是なれり、瓜を、ふり、と讀むこと古意にかなへり、枕草子うつくしきものこ云條に「ふりよかきたるちごの顔」と見えたり

稽古　習學することをいふ

尚書堯典に曰く、若二稽古一帝堯云々　又た孔安國傳に曰く、若須也　稽考也　能順二考古道一而之者云々とあり

螢や雪の　學問に勉強することをいふ

孫氏世祿に曰く、孫康貧無レ油　常二映レ雪讀書一と又晉の車胤　恭勤不レ倦博覽多聞　家貧不二常得一レ油　夏月則練囊盛二數十一螢火一以照レ書　以レ夜繼レ日云々

聞聲知人

桓温生れて未た期ならず　温嶠見レ之曰、此兒有二奇骨一可レ使二試一啼一

及レ聞ニ聲ヲ曰　眞ニ英物也　云々

馬と欺く小男鹿の　威勢の強き事をいふ

趙高奪ニ秦二世之秘一　使ニ群臣從レ己　指レ鹿爲レ馬　有ニ言レ鹿者一以中レ法　云々

何々する八斗の才　才の秀でたるをいふ

謝靈雲曰　天下ノ才共ニ一石　子建獨得ニ八斗ヲ一　予與ニ衆人一共ニ得ニ一斗ヲ一矣　云々

周章

あはてること訓す　魏志の陳登傳に　孫堅遣レ軍攻レ登登乘レ城望　知ニ其可レ擊乃引レ軍抄ニ其後一　賊周章方結陳　不レ得レ還レ船　云々

狼狽　人の顚び迷ふに喩ふ

二獸の相倚るなり　狼前両足絕短　毎行常駕ニ于狼一　失レ狼則不レ能レ動　云々

畜生の奴

人を罵りて畜生といふ事下賤の者の口氣にして大司馬將軍の詞には如何あるべく思はれたれど是れ以て我が國にのみ云ふ雜言ならず　資治通鑒隋の高宗紀に太子の宣花夫人を挑む由を聞きて　上恚抵牀曰　畜生何足付天下　とあり唐人の詞なれば蛇足に似たれど記し置く

一家に仁あれば一國仁をおこし云々

大學齊家治國の章に　一家仁一國興仁　一家讓一國興讓　一人貪戻一國作乱　其機如此　とある語を直に書るなり

白ゆきかへって黒しといふ義あり

出典未た思ひ得ず　但し綾錦といふ俳書に　江戸五俳哲の什を一句づゝ掲げたる第一に

何ど見ても雪ほど黒きものはなし　　徳元

とあり徳元は正保四年に歿せし人にて　近松翁より年代早ければ翁若し此の句に基きて書けるかされば亦名月の古句に

名月や澄むほど暗き松の蔭

とあるあれば或は此の句よりか之れ全く禪門の法語より出しにやと聞けり　然れば徳元の句意もはた據ごころ有りげなり

刀の錆は刀より出て刀を腐らし、檜山の火は檜より出て檜を燒く

之は難波土産にもいへる如く翁の造語なるか

口に甘き食物は腹中に入て害をなす

これ家語に　良藥苦於口而利於病　とあるに基きて近松翁其の裏を云ひたるものならむ

飽まで食ひ温に着て

孟子滕文公上篇に　飽食煖衣逸居而無教　則於禽獣　こあるに因る

管絃の道、文の道、云々

徒然草に　有りたきことは誠しきふみの道　作文和歌管絃之道　云々こあるに

よりて言替たるか

月の都の宮人の種や此世にふる露の　云々

こは竹取物語に

かくや姫なく〳〵云ふ、おのが身は此國の人よもあらず、月の都の人なり

夫を昔の契りありけるよよりてなむ、此世界よはまうで來たりける、

こある趣き抔より思ひ付きて詞を品よく書けるものならん

唯一文字にからべにさせば二月の雪とちるもあり

こは和漢朗詠集上春之部に　子日　橘在列

倚松根摩腰　千年翠滿手　折梅花挿頭　二月雪落衣

こある落句の詞なり

一人とは天子みかどの御事

詞大雅烝人篇に　夙夜匪解　日事一人　こあり註に　一人者天子

也　こ記しあり我朝大寶の職員令にも太政大臣の下に　師範一人儀表四

海　こあり集解に朱曰　一人者天子也　こ見えたり

邯鄲の夢

此の句余程用ひられつゝあり先づ質店之段にもあり又阿漕之浦には「思へば盧生が夢の樂み」とあり又時賴記には　實よや魯生が見し榮華の夢は五十年其邯鄲の假枕　とあり皆同意のもの也

大和故事に

唐開元七年有呂翁得仙術息於邯鄲之舍時少年盧生衣短褐乘青駒同來此所與呂翁語盧生自顧我衣裳之敝歎曰大丈夫生世不諧困如是也呂翁曰歎其困窮何也盧生曰吾常志學今已過壯不得官職而猶勤畎畝非也困何言託而覺眠主人方炊黃粱呂翁取囊中之枕授盧生曰枕之而眠百事爲如志盧生枕之夢娶崔氏之女後爲渭南尉遷監察御史轉起居舍人知制誥（中略）盧生年八十覺病死欠伸夢覺其身在邸舍呂翁亦坐其傍主人炊黃粱未熟盧生蹶然起曰豈其夢也呂翁曰人世之適亦如是矣盧生憮然曰夫寵辱之道、究達之運、得喪之理、死生於一眠中皆盡知之是所以窒吾欲也　云々

實に掌中の一粒種　人の愛子を稱し云ふ

杜甫の詩に　掌中探見一珠新　と蓋し之より採りしものならんか

北の方

詩に　焉得ニ諼草一言ニ樹之ニ背一　と其の註に　諼草令ニ人忘レ憂ニ背北堂也　とあるより引き出し稱へ替へしものならんか

翩翾たる黃鳥丘隅にと、まる人として止る所に止まらずんば鳥にしかざるべしとかや

是は誰も知らるゝ如く　大學に　詩云緡蠻黃鳥止ニ于丘隅一　子曰於止知ニ其所ニ止一　可ニ以人而不ニ如鳥一乎　とあるをこれるもの也

もにすむ虫のわれからと　云々

古今和歌集戀五に　典侍　藤原直子

あまの苅る藻に住む虫のわれからこねをこそ泣かめ世をば恨みじ

とあり伊勢物語にも此の歌記載あり　われからは蟲の名なり　妻もをなじ海人の業ごいふより　藻に住むこつゞけわれからこ仲入なしのころびねよ云々　偖も甘くつなぎたるものかな

沙頭に印をきざむかもめ沖洲にすだく浦千鳥

平家物語卷三　有王島下りの段に

海の邊につきて尋ぬるに沙頭に印を刻む鷗　沖の白洲にすだく　浦千鳥の外は　あこ訪ふ者もなかりけり　云々

こあるに據る蓋し其の本は　和漢朗詠下雜之部

水付漁夫　沙頭刻印鷗遊處　水底横書雁度時

こある是れなり

鳴のはねがきも、はがき

古今集戀五に

曉の鳴の羽ねがきも、はがき君が來ぬ夜はわれぞ數かく

こある歌の詞のみを採れり意に於て關はらぬもの、如し

しぎ蛤のあらそひ

鷸蚌故事也　出戰國策曰

趙且代燕　蘇代謂惠王曰　今日臣來過易水　蚌方出曝　而鷸啄其肉　蚌合而箝其啄　鷸曰今日不雨明日不雨即有死蚌　蚌亦謂鷸曰　今日不出明日不出即有死鷸　兩者不肯相舍　漁者得而拜擒之云々

此の趣向を借りたるもの也

我朝のひれふる山…亦…返事を松浦佐用姫の

此の出處は萬葉集なり　卷五に山上憶良の歌あり其序に

大伴の佐提比古　朝命を奉じて藩國に使せし時

妾松浦佐用比面　別れを嗟き高山の嶺に登り遥に離去の船を望み　遂に

領巾を脱して麾く傍人流涕せざるなし因て此の山を領巾麾之嶺と云ふ

遂に石と化せし云々

故に夫を慕ふ句に必ず出せり「原書漢文長ければ之を略し玆に其要を摘す」

吉野の川に鵲の橋は…亦…かさゝぎの渡せる橋や

是又誰も知らる、如く新古今集の家持が　かさゝぎの渡せる橋におく霜の

云々とある詞に據れるものなり

烏鵲天漢を塡て橋を成し織女を渡すと云ふ物語風俗通か博物志かに見受しと覺ふ

傳へ聞く陶朱公は勾踐をともなひ會稽山に籠り居て種々の智畧をめぐらし終に吳王を滅ぼし勾踐の本意を達すとかや

（國性爺九仙山にあり）此文凡べて謠曲船辨慶のうち靜が舞の段の詞を一字もたがへず抜きてうつせしもの也

二葉に見せて　せんだん女…亦…栴檀は二葉より香し

難波土産に　故郷を出つるこの二端こうけて　せんだんの二葉こいふよ

かけたり　云々

栴檀は嫩より香しと云ふ諺　觀佛三昧經にありとぞ　我が朝の書には西行法師の撰集抄に　栴檀はふたばより香しく梅花つぼめるに匂ひあり　とかけるも見

ゆされば古き時よりの諺ならん

天の時は地の利にしかず　云々

孟子公孫丑下篇に　孟子曰　天時不如地利　地利不如人和　とあり

吉凶は人によって日にあらず

漢書敘傳斑彪が王命論に　窮達有命　吉凶由人　の語あり又徒然草にも赤舌日こいふ事　陰陽道には沙汰なきなり（中略）吉日に悪を爲す必ず凶なり　悪日に善を行ふ必ず吉なり　吉凶は人よりて日よらず　とあり是等の詞をこれるならむ

一粒の花の種は地中にくちず終に千りんの梢にのぼる

諸曲の文中にて見し心地すれど慥ならず是れ後日に答へん

瓜田履李下冠

瓜田不レ納レ履　李下不レ正レ冠　と蓋し瓜を取り李を盗むかと人に疑はれんを恐るゝの意を應用せしなり

魚心あれば水心あり

是は諺の如くなれども水魚の交と云ふを裏に移せしものならんか三國志に

昭烈帝得二臥龍一悅曰孤之得二先生一猶二魚有一レ水也　云々

塞翁がうまふ　云々

昔塞上翁の馬亡ぶ胡人之を吊ふ翁曰安ぞ福あらざるを知らん乎後馬駿馬を引

て歸る人之を賀す翁曰安ぞ禍あらざるを知らん乎後其子馬に騎て臂を折る人之を吊ふ翁曰安ぞ福あらざるを知らん乎後兵出の壯丁皆戰死す其子跛に因て免るるを得たり

これ人生の禍福常なきを引き書けるもの也

虎うそぶけば風おこる

古樂府の中にも　虎嘯谷風起　龍興景雲浮　の語見わたり

玉ある淵は岸破れず龍すむ池は水涸れず

難波土産には此の詞文選に見わたりこあり

何れも他書に同意の語の見わたるを云はゞ大戴禮勸學篇に

玉居山而木潤　淵生珠而岸不枯

こ見わ亦韓詩外傳卷五に

水淵深廣　則龍魚生之　山林茂盛　則禽獸歸之

こある上句　龍住む池は云々こいふに意似たり

潮干る玉潮滿つ玉

これは火々出見の尊の海神より授けられし神寶にして潮滿玉を海水に漬せば潮忽に滿ち又潮涸玉を漬せば潮自づから涸るこいふ　日本紀神代上卷にあり

昔もろこしの白樂天といひし人日本の智惠を量らん云々

此所の文段具さに白樂天の謠曲に有て誰れも知らるゝ所なりと　難波土産に註

せば全く謠曲者の搆造と思へり

鳧の脛短しと雖ども之を繼ば憂なん鶴の脛長しと雖ども之を斷ば悲なん

これ誰も知らるゝ如く莊子にあるを採れるなり

荷物さへれろしたに一物が有るものか

近松巢林氏御箱の掛合せ文句にて凡べて淨瑠理と云はず小說と云はず巢林氏を勦窃せしもの數知れず誠に文學の大問屋といふべし

されば伊賀越道中双六沼津之段に　心に一物荷物は先きへ　と一物二物の文句をつゞけ掛け故人の耳に止まりて大に感賞せらるゝも元皆な巢林氏の作を畫がけるもの也

青苔ころもを帶びていはほのかたにか、り白雲帶に似て山のこしをめぐれり　（國性爺）

謠曲白樂天に載せたるを其儘に引きたるなり元來此の句は江談抄卷四に出でたる都の在中の詩なり　但し江談抄には

白雲似帶圍山腰　青苔如衣貧巖肩

とあるを轉倒し且文字をも聊かたがへて白氏の作に附會せしならん

こけ衣きたる巖はさもなくてきぬ〳〵山の帶をする哉

これも江談抄右詩の後に在り詞聊か變れり卽

菩衣着たる巖はまろびけんきぬ〳〵山の帶するはなぞ

こ見に按ずるに之は後人の右の詩を歌に譯して戲れに記入せしをそれながら轉寫して傳へしものならん然るを謠曲の作者種子につかひて白氏こ住吉明神この對和の樣に作りなし、なるべし

枕をたゝむ夢たゝむ千里を胸にたゝみこむ

之は難波土産にいふ船中抔に用ゆる懷中のたゝみ枕より邯鄲の枕をふまへて夢たゝむこ云ひ飛張房が縮地の杖の意をふまへて千里を胸にたゝみこむこ云ふ殊に渡海の遠けき千里あなたへ着くを胸にたゝみ貯ふるの情に寄せしならん

按ずるに邯鄲の枕は前記の如く異聞集太平廣記にもあり　費張房が事は神仙傳に出でたりこ覺ふ

二千里の外故人の心三五夜中にあらねども

和漢朗集下卷に八月十五夜こある下に

三五夜中新月色　二千里外故人心

こあり是れは白樂天八月望夜獨禁省直其友懷元稹作之と白氏文集にあるを本こす

あまの鳥船岩船のうらはしり行く如くなり

天神降臨の時天の鳥船に乘てこも又天の岩船にて空より降り給へりとも日本紀

神代巻に記せり鳥船は空飛ぶ鳥に似たるより之を名づけ岩船は堅き由の稱なり

秋風に鱸つるずんこうの湊

鱸魚は松江の名物と云ひ傳ふれば「すゝきつる」を松江の枕詞にしたるにや

そは後漢書左玆傳に　曹操顧衆賓曰　今日高會珍羞略備

所少吳松江鱸魚　云々

秋風に鱸釣るこ續けたる詞は雅有鄉集に

世の中は唯秋風に鱸つる浦のこまやぞ住みよかりける

こあるに據れるならん

琴詩酒の三つの友

白氏文集に白居易の三友とて誰れも知る所卽ち

今日北窻下　自向何處爲　欣然得三友　三友者爲

誰　琴罷輒擧酒　酒罷輒吟詩　三友迭相引　遁

環無止時　云々

柳さくらをこきまぜて

古今集春上に　素性法師

見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

とあり之に據れるならん

鳥のそらねははかるとも

枕草氏に　清少納言辨頭行成と夜深く物語りしたる翌朝行成より文たこしたるを自ら書きて「いこ夜深く侍りける鳥の聲は孟嘗君のよや」ときこゆたれば立返り「孟嘗君の鶏は函谷關を開きて三千の客わづかよ去れりこいふは逢坂の關の事なりこ」あれば

夜をこめて鳥のそらねははかるこも
よにあふ坂の關はゆるさじ

心かしこき關守侍るめりこきこゆ」とあるが本にて後拾遺集雜二にも又小倉百人首にも載せられたれば里のうなるも知り過ぎたる物語こぞなりにける

をのの柄もれのづからとや朽ちぬべし

述異記に　晋王質　伐木至信安郡石室山　見數童子圍碁　與質一物　如棘核　含之不飢　局未終斧柯爛盡　既歸無復時人

こある故事なり　歌物語抔にもしばく引けり

劍は夏野のすゝきをみだし

此の條は　日本武尊東征の御時　駿河國にて野火の難に遇ひ給ひしに尊の佩劍自然こ拔けて草を薙ぎ攘ひたる由　日本紀に見ゆ　此の故事に據りて書けるならん

關吹きこゆる秋の風

續古今集羈旅に　中納言行平の歌に

旅人の袂すゞしくなりにけり
　關吹きこゆる須磨の秋風

飛んで火に入る夏のむし

法苑珠林に　如飛蛾見火投　とあるより云ひ始めし諺なる由に聞けど未だ本書を見ず

何事もむくいの罪はもれがたし
　火に入る夏のむしの我れから

と云ふ古歌あり出典今思ひ不出

いつはりのなき世なりけり神無月

續後拾遺集冬の部に　前中納言定家の歌に

後句　誰が誠よりしぐれそめけむ

みちてはかくる影なればかけてはみつる月を見よ

老子に　日中則移　月滿闕　とあるに據りけむ

雲無心にしてたなびけば

取りいでゝ云ふ程の事ならねど　陶淵明が歸去來辭に　雲無心出岫　とあるに據れるか

楚人の一炬に焦土となんぬ

杜牧之阿房宮賦に　楚人一炬可憐焦土　とあるに據る

水中の遊魚は釣りはりと疑へり雲上の飛鳥は弓のかげ
とも驚けり一りんもくだらず萬水とてものぼらねど

是は謠曲融の末段　月を形容せし文句なり　但し聊か異なる所あり見合すべし

「水中の遊魚は　「釣り針こ疑ふ　「雲上の飛鳥は　「一りんも下らず　「萬水も下らず　云々

かつらぎの久米の岩橋よるならで　云々

水鏡中文武天皇の紀に

役の行者此の葛城の山に籠り居て五色の雲に乘て仙宮にいたり鬼神を使ひて　水を汲ませ　たき木をこらす　又御嶽こ此葛城の峯こに岩橋を渡せこ此鬼神ごもに云ひしかば　夜るくいはほを運びて削りこゝのへ既にわたし始めし程に行者心元ながりて　ひるも唯形をあらわして渡せこせめしを一言主の神　わが形の見にくき事を恥ぢて猶よるくばかり渡し侍りしかば行者怒りて　神呪をもて此の一言主の神をしばりて谷の底に投げ入れきこあり此の故事ならん　元享釋書にも見ゐたり

泰山をわきはさんで北海をこゆ

孟子梁惠王上篇に　挾泰山以超北海語人曰　我不能是誠不能也　爲長者折枝　語人曰　我不能　是不爲也

非不能也云々王之不王是折枝之類也

こあるに據る

寶の山に入りたる如く

天台止觀に往生徒死無可得如入寶山中空手而皈

また大智度論の中にも無信如手入寶山中不能有所取

こある由なれば此の諺は佛典より出て且いと古きと知るべし

唐子わげには薩摩櫛島田わげには唐ぐし（梅檀女道行ニアリ）

難波土産に曰はく此の文句うはべは何事もなけれど底意にふまへたる故事ありて書出でし也　莊士に蝸牛の角の上に各々國一ケ國有り左の上なるを蠻の國と名づけ右の上なるを蜀の國と名づく此の左右の國互に爭ふて戰ふと云へり此の語の心をふまへて中昔の前句附の笠に

かしらの上に國二ケ國

といふ題ありしを加賀笠の下にさしたる薩摩櫛と云ふ句を付けて勝句とせり世上の人の語り草となる故に此の道行の出の文句また之をうつしたるなり

唐子わげには和國のさつま櫛和國の嶋田髷には唐土の唐櫛と大和唐土打交ぜてと云ひかけて梅檀女と小むつこと打ちまじりての旅立を斷る也筆の迴り妙と謂つべし

正直のかうべにやとる神風は

正直の首に神宿るといふ諺俗に似たれど古き出典あり倭姫命世記に日

月迴四州雖照六合　須照正直頂　こあり

一說に左の古歌を諺にくづせしものとも云へり

心だに誠の道にかなひなば
祈らずこても神やまもらん

いがき越にしも戀の罪

いがきとは瑞籬と書きたるなり之れ　たまがき　みづがき　抔云ふ如し皆同一なり

彼の齋宮の忌詞

是は經を染紙こいふ類にて　血の汚れを忌めば死体を取り納めて吳る、者もなく　道端に捨らるべし抔の塲合に用ひられし

道もせ……野もせ……庭もせ

もせとは狹きこと言ふ意にて古歌に數々出せり例令道もせに散る　抔こあり是れ道も狹くなる程散るこの意なり　然るを淨瑠理にては　もせ　を面こいふ意になせり之は何時の時代より誤り來りし者なるかは知ねども　道もせ…野もせ…庭もせ…共に　面　といふ字に用ひつ、あり　流石の近松翁も其れに引き込まれたるものか　蓋し淨瑠理語り工合の都合にて誤りを知りつ、爲せしものか

あからさま

（鎌倉三代記ニアリ）

日本紀に　倏忽之間出其不意則破之心也　倏忽の訓あからさま

亦狹衣物語に　夜居の僧のあからさまにいでたる　こあり

あけくれに　（朝に夕に、訓、つれに、たへず、の意）

源氏物語に　このころあけくれごらんずる長恨歌の御繪

あこぎごうら

六帖に　逢ふ事をあこぎの島に引く鯛のたびかさならば人も知りなんの歌から出た語

あこや（阿古屋）

介の名　大さ一二寸より六七寸　内面は白に青紫の色を含み　特質こして眞珠を持つ　此種類は　しんじゆかひ　そひかひ　てふかひ　たまかひ　あこや等なり

依て作者が珠母「介の名」より思ひ付き遊君の名に採りしもの也

あげまき（總角）

淨瑠理文句中二種に用ひられつ、あり

一、昔の小兒の髪の結び方の名にして未だ年行かぬと云ふ事に用ゆ　源氏物語に　あげまきの長き契りを結びこめ同じ心によりもあはなん　之等より引き出したらんか

二、紐の結び方の名　（輪を左右に出だし中をいしだゝみに組んで結んたもの）即ち　みすよろひ等に用ひられたり　一の谷嫩軍記須磨の浦の段切りに

總角こつて結ひ付けるこあり之れ兜の紐の事を云ひしなり

汗水になつて

淺井了意のものせる東海道名所記に「あせみづになりて目をさまし　書きこゞめぬ」こあり

或人言ふ此の語水の樣に汗の出る丁の意なれこも語に拘泥し過ぎたりこ云へり亦た重言なりこなじる人もあれぞも近松氏も單に意味を強める爲めに水こ引き掛けゝものにて決して水に夫程の義を含ませたものでも有まい

あた（感）

心中二枚繪紙草に「田地賣らせた女めが市さまもるる　身よりこは　はて偖偖あたしたたるい」是れ凡べてそのかたる形容詞の意味を強める丁

あたら　名詞にかゝる接頭語　可惜の意

萬葉集に「ごふさたて　足柄山に舟木きり　木に伐りかけつ　あたら舟木を」千載集、小大進に「あす知らぬ徜室の岸の根なしぐさ何あたら世にれひはじめけん」之等より引き出しつるか

ぜんざい　京阪の方言　（善哉）

漢語にて　善いかなの義　されば近松氏の作　釋迦如來示現之段に「善　哉　善哉　釋　迦　牟　尼　如　來」なんこ云へり

ねぐら放れしほこゝぎす

古事出處詳かならず　蓋し時鳥は卵をかへす事を知らず故に鶯の巣に到り彼の卵を食して自分の卵を産み置くにかや鶯は自の卵と思ひ養育の勞を厭はず　云々の事實より引き出せしならんか

萬馬を乱し都より　（太功記五段目）

是も古事出處を詳かにせず　蓋し或漢書　離宮にばんば堂と稱するありて三階の樓上種々の鬼神の顔を額となし人を畏れしむ帝之を眺めて盃を傾け以て武威を示す　云々を見し事あり　阿野のつぼねの顔色此のばんば堂を乱せし影容を寫せし者ならんか

虎の威をかる狐　戰國策から出た語

是は狐が道を行く時他の獸類に馬鹿にさられるのを考へ　其狡猾な所から巧みに虎を欺き　虎の前に立つて行つた所が　他の獸は何れも虎の來るを見て平伏する　是れを虎に見せ付けて大いに虎を驚かす　畢竟他の威力を我が身に假りて狡猾に事を行ふ例なり

戰國策に

荊宣王問群臣曰　吾聞北方之畏昭奚恤也果誠何如　群臣莫對　江乙對曰　虎求百獸而食之　得狐　狐曰　子無敢食我也　天帝使我長百獸　今子食我是逆天帝命也　子以我爲不信　吾爲子先行　子隨我後觀百獸之見我而敢不走乎　虎以爲然　故遂與之

行獸見之皆走虎不知獸畏己而走也以爲畏狐也天今王之地方五千里帶甲百萬而專屬之照奚恤故北方之畏奚恤也其實畏王之甲兵也猶百獸之畏虎也云々

六具

兵卒なれば

予戟利劍弓矢やなぐひ

大將なれば

鎧太刀采配團扇鞭旗

陣屋の

幕旗楯太鼓法螺床机

番所の

つくぼう　さすまた　そでからみ　よりぼう　早繩　松明

合ひ圖の

鉄砲　のろし　旗　法螺　飛星　松明

身固めの

鉢巻　しのびのを　うは帶　ひかへを　腰のを　くりしめのを

義太夫獨習新書四の巻說明終

増補 生寫朝顔話

作者　山田案山子遺稿
　　松翠園主人校補

生寫朝顔日記は近松徳三の遺稿なり　徳三は浪花坂町の娼樓大桝屋勝右衛門が子なり初名勝助　徳三は通稱にして　後に徳叟と改む　俳號雅亮　幼きより戯曲を好み近松半二の門に入りて　淨瑠理の作數多あり　箱根靈現躄仇討　花上野譽碑　敵討優曇華龜山抔最も佳作と聞ゆ後年狂言作者となりて　司馬徳叟亦芝屋徳叟とも稱せしが程なく近松の舊稱に復せり　文化の始め　熊澤蕃山が露の干ぬ間　こいへる今樣歌より案じ付きて　朝顔の演劇を綴りしを　故ありて未だ演ずるに至らざりしに　文化七年八

月廿六日　可惜徳三は病で歿せり　さるを同門の後進松柳　頗る遺憾の事に思ひて翌年之れを讀本躰に補綴して　徳叟遺稿朝顔日記と題し板行せり　其後更に演劇に改作し　又嘉永三年増補生寫朝顔話　といふ淨瑠理にものせるあり　即ち今傳ふる所是なり　然れども皆徳三が意匠を聊か校補したるに過ぎず

三下歌

朝顔日記四の口

濱松小家之段

、、おもふことよとは。たがいにしへのかこちごとはわがみのうへにふる。なみだのあめのはれまなく。あはれ——みゆきは

かずくの。うきかさなつてめかいさへ。合文爾いねいねなきつぶしたるまうもくウの。合ちからとたのむものとては。わづかにほそきたけのつゑ。あるにかひなきたまのをのきるもはてざる三みのいと。ろめいをつなぐよすがにと。せなにわいかけしほくと。めころのやみぢたどりくる。あとにおほぜいさとわらべ。てんでにたけぎれふりまわし汎アレくあさがほのこじきめくら。たゝけく。うてよくととりまわす汎ア、コレく。めのみえぬものをそのやう

にはせぬものじやはいなァ。どれも〳〵よいおこさまや。こんどよいものがあつたらあげふぞへ。エヽ、いやじやはい。こじきにたれがものもらふもんで。ナア、じろぼう。ヲヽそふじやノ〳〵。あたきたないこじきのものもらふものかい。そんなことぬかしたら。

コリヤ、かうじやとみな〳〵が。たけでうつやらいしうつやら。そだちもげすのわんぱくどもよつてかゝつてさいなまれわびければ。

汎ア、コレ〳〵。モウふたゝびいやしませぬ。

こらへてくだされあやまつたと。つちにひれふし。

汎ヲヽ、ないてあやま

るならかんにんしてやろ。　サァみなこい。いつものどてゞしばいごと。五ろよ。じろよと。よびつれて、みちぐさ。しながらはしりゆく。あとにみゆきはわつとなきぬヱ、ケミあさましやなさけなや。汐たれあろふきしどのからう。あきづきゆみのすけがむすめともいはれしみが。いかにおちぶれたればとて。すぢめもないさとのこに。こしきよ、ひにんとうちたゝかれ。あやまりまーたはなにごとい。みをだきーめてどふとふー。かこち。なみだぞいぢらーき。

順禮うた

あらたふとみちびきた

〜まへくわんおんじ。とほきくによりはるばると。めのとあさかはあさからぬ。なげきもみにぞおひづるの。みゆきのゆくへたづねんとおもひいたつたるじゆんをいも。しんくにうきみやつれがさ、つゆのやどりもとりかねて。つゐをちからにあゆみより 訶コレ〳〵ぢよちう。そつじながらチトおたづねまうしたいと。おとなふこゐになきがほかくし。ヲヽコレハマア。どなたかはぞんじませぬが。わたくしはめかいのみえぬもの。がァ、なにごとのおたづねぞと。いふものごしのつまはづれ。どうやらたづぬるその

ひとに。にたとおもへどなりかたち。これ
はひにんことにもうもく。こゝろのまよい
と。おもひかへし　汚ヲ、わしとしたこと
がそゝうな。めかいのみえぬおひとに。と
ふことはいなものなれど。もしこのかいだ
うを。と〳〵のころは十六七。みめかたちひ

とにすぐれ。やしきそだちのおほふりそで。
ともをもつれずたゞひとり。とほられし
やうすをば。もしきゝはなされぬかと。い
ふはまさしくわがみのうへ、と。むねさわ
ぎしが　まてしばし。よのなかふにたこ
ゑのひとふにたことの。なきにあらず。と

おもひかへし（イロ）ね。汐ヲヽ。それはマア。せうしなことや。ゆきゝもしげきこのかいだう。ぢよろうのひとりたびはいくたりといふかぎりなし。さやうにおたづねなされては。なかなかしれふやうもなし。がマアくにはいづく。なはなんとまうしますへ。キメサレバイノ。くにはげいしうふくをか。なはみゆきさまと。

いふはいよ〳〵うばあさかねヤレ〳〵、なつかしや。ニ、といひたさも（スリコミ）おちぶれはてしいまのみを。ヤ。われとなのるもおもてぶせ。ネン。とにそれぞといふならばつれていなれてちゝはゝに。ツレ。どのかほさげてまみゆべき。ニ

つみふかきことながら。いつはりすかして
かへさんと。なほしもころをくろまして
汙ヲ、なるほど。そんなうはさもきいたれど。
そのぢよちうは　くにをいで、よりさま
ざまのうきめにあい。やう〳〵のがれこの
へんまではこられしが。どうしたことか四
五にちまへに。ふちかはへみをなげて。し
なしやんした、ト ひとのうはさ。汙ヤア。〳〵
〳〵なに。そのぢよちうはみをなげて。ハア。
三はつとばかりにみをうちふし　ぜん
ごしやうたいなき　ゐたる。　みゆきもと
もにかなしさの。　なんだかくしてそばに

より。ね　汎コレまうしぢよろうさま。かなしい
はおだうりながら。らうせうふじやうのよ
のならひ。さだまりごと、あきらめて。は
やうくにへおかへりなされ。あと、むらふ
ておあげなさるがほとけのため。うみやま
かけしながのたび。づゐぶんけがの、ない
やうにと。ふたりハ　いひつ、たつてかけごやへ
さぐり〳〵　ていりあひのかねにあはれ
をそ―にへにけるあとにあさかは
うつとりとなみだながらのひとりごと
汎エ、コレ　まうし。きこえませぬぞへみゆ
きさま。いへでなされしそのときも。ひと

ことあかしてくださつたら。しやうもやう
もあらうもの。おいとーやおくさまは。お
まへのことをくにやんで。あけてもくれて
とこ。ニしぬるいまはのきはまでも。一どと
うぞたづねてつれかへり。せめてゐはい
にぶじなかほを。あはしてくれよとわ
たーへのゆいごん。それゆへいみのあく
をもまたず。くにくまわるじゆんれいも。
ニおまへにあはふばつかりじやに。な
ぜーんでは、くださんーた。わしやおゐ
はいへいひわけを。なんとせふぞとみをも

だへ。うらむるひとはめのまへにありとも
おらぬ　くどきなき。　きくにみゆきはみも
よもあられず。　こやのうちにてはをかみ
しめ。なくこゑたてじとくひしばり。
こらへこらへしくるしさは　ほねもくだく
るばかりにて　なくよりも。　なほつら
かりし。　みだるゝこゝろをおし
しづめ。あさかはふみだの、かほをあげ。
　汎ア、われながらぐちのいたり。いつまで
いふてもかへらぬこと。このうへはぼだい
のため。うちのこりのふだゝよをまわり。
はやうくにへかへりまじよふ。そふじやそ

ふじやとたちあがり。こやのとぐちへさしよつて。（いね）イヤまうしごよろうさま。いかいおせわでござりました。もふおさらば。いうづきに。わかれをつげてゆきすぎトしがなにかこゝろにうなづきてこかげにのび、（中）うかゞふとも。しらぬめしひのかなーさにおもはずこやをまろびいで。

みえぬながらにのびあがり（注）コレイノコレあさか。いまいふたはみないつはり。たづぬるみゆきは、わーじやはいのふ〳〵〳〵。

こゑをきいたそのときは。とびたつやうにあつたれどもなァ。あさましい、〳〵このノ

なりで。ドウマアかほがあはされふ。とはい
ひながらわ〳〵がみをよく〳〵だいじとお
もへばこそうみやまこへて――うきく
らうめぐりあひはあひながら。だうよく
にもよそ〳〵しふ。いふていなしたこゝろ
のうち。汎どのやうにあらふぞいの、
〳〵。たゞなにごともこれまでの。や
くそくごとゝあきらめて。コレ。かんにんし
てたも。〳〵〳〵や。四間合とりわけてか
なしいはこれほどふかうなおのわしを。
やつぱりおじやとおぼしめし。みのいたづ
らをくにやんでおはてなされたはゝさ

まの。ーにめにあはぬのみならず ごめい
にちさへつゆーらず はかないことがヱ、
マ、あろかいのふ。合セッキヨウおもへばくばー
ーあさまーやー四合おやくのばちばかりで
もめがつぶれいでなんとせふ。ゆるし
てたべと ばかりにて。こらへくした
めなみだ わつとさけびて みをなげふ
ーぜんご しやうたい なきしづむ
たちきくあさかもしのびかねわつとひ
ところなきいだせば。 さてはそこにとみ
ゆきがおどろき。こけつまろびつにげゆく
ーをすがりとゞめて。汎コレマアくまつて。く

ださんせいのふゞ。すがたかたちはかわつて
も　ひとめにもみちがへねども。なのりか
けてもなか〳〵に。あかさぬきしつとしつ
たゆゑ。よそごとにいひなして。こかげに
かくれてしゞうのやうす。たちきゝしたも
つきせぬゑん。さりながらこのとしつき
ほねみをくだきやう〳〵たづねあふたもの
。こゝろづよふいなそふとは。そりやどう
よくじや〳〵。ェ、きこえませぬ、〳〵、〳〵
わいなァ。ヲ、そのうらみはことわりながら。
いまもいまとていふとほり。みのいたづ
らでこのやうに。おちぶれはてゝなりかた

ち。どうマアそれとなのられふ。ーわーがこころのかなしさを。おもひやつてかんならず。ーかつてたもるな　あやまつたと。すがりなげけば　刈ヲ、なんのマアしかりませふ。たとへどのやうにおなりなされても。めぐりあふたがわしやうれしい。とはいふものゝこれはまた。あんまりなお、ちぶれやう。ひごろのしんくがおもひやられて。わしや、〳〵、このむねが。さけるやうにござりますわいのふ。シタがコレおきづかひなされますな。わたくーがおや。ふるべ三ぶろへゑといふひと。さよのなかやまの

ほとりとかやにながらへてゐさんすとのこと。はだみはなさぬまもりがたな。それをーやうこにめぐりあひ。あそじろうさまのありかをたづね。きつとおあはせまうしましよう。がなにをいふてもこゝはかいだう。やどあるかたへいそがんとなきいる

みゆきをいたわりて。たちあがるをりこそあれ。合よみちぼかくわなぬけきちべゑ。よいことがなとのみとりまなこふたりがそぶりもくさーと。そばへたちよりてうちんのひかげにみゆきがかほうちながめ

河ヨウ、

わりやいつぞやまやのばゞに。百りやうでねをきめたむすめ。いつのまにみだれのぐれになりおつたぞい。ーかし、いしやにかけたらなほらぬこともあるまい。なにぶんもとでいらずのーやうぶもの。ドレひろふてやろとてをとるを。ーあさかはひきのけけーきをかへ。ね　汎ヤァをんなとおもひよがいしやると。ゆるーはせじとつゑおつとり。ねしこみーかたなぬきかくる。ソンそのてをおさへて。ねエ　汎ム、ハ、〳〵ムハ、、、。こりやヽヲいい。わなぬけのきちべゑといふてな。ぽんごくをまたにかけるひとかひーやうばス

い。かつをかきひねくりまわしても。びく
ともをるをとこじやないは。ぼろそのさが
つたみだれせふより。うられてきぬのべゞ
河イヤすゐさんなかどわかし。みごとうる
ならうつてみやと。ぬきはなーてきり
こむかたな。さつーたりとみをかはゝ。
まうひやくねんめとわなぬけも。おなじく
たびざーぬきはなー。くわんねんせよと、
きりむすぶ。合ヨビろこつこつ。ーみゆきはあせ
れどまうもくのなんとせんかたふみきは
ら二にんはうちあふつきあかりこゝを

せんどと（ヤ）　上三重
いどみあふ。　いかゞは
けんわぬけが　いゑにつまづきまつさ
かさま。　まろぶをえたりとおこしもたて
ず。　かたせもわからぬめつたぎり。　さし
ものわるもの七てん八たう　のたうちまわ
つてしゝたるはこゝちよくこそ　みへに
けり。
あさかはしつかとゞめのかた
な　汎サアくうれしや。　みゆきさま。　わるも
のはしとめましたと。　いふうちよりもこ
ゝろのたるみ。　そのまゝそこにたふ
れふす。　みゆきはこはくさぐりより。
いたはるてさきにたふのり。　汎ヤア、

く〳〵。そなたもてきずおやつたか。なふかなしやと。だきかゝへ。あさかいのふ、く〳〵。ところをかぎりによびいくれば。いきふきかへ〳〵。めをひらき。みゆきさま。おんみにけがはなかりしか。わ〳〵はなんともせぬが。そなたのてきく、ずがきづかいな。きをたしかにもつてたも。ととりつき。なげけば。アヽコレ、こゝろがたかい。わたしはほんのかすりきづ。きづかふことはござりませぬ。たれもみぬうち。サアおいでと。かたなをおさめみゆきがせなに。おはすもなみだ〳〵ふる三みの。

いつかむかしに。合　かへ
らふび　いとゞもつるゝ　こゝろをば。
てんじかへても　てきずのいたみ。まう
もくならぬ　わがみさへ　つゐ——
——を。四間ヨビ　ちからにたちあがり　おんなご
ころもはりつめし。合　ゆ
みはりつきの——よはのかね。　つく〳〵す。
ちうぎの　ひとすぢみち　ともなひて　こ
そ　いそぎゆく。

鎌倉三代記

三浦別之段

三重
いりあひをぎ。さればふうがのうたひとは。
ツナギ
合 こひとやきかんむしのねも。さは本
ブシ
のこゝかはづの――おゝ〳〵も。――し
ゆらのちまたのたゝかひと　みにひきーむ
るかぶとのを。わかみやぐちのせんじやう

よりいちもんじにとつてかへす。おゝろは
さらにをくれねどもしおちうどゝとひとやみ
うらがかう〳〵の。ねんりきつうづはゝの
のき。うれしやこゝそときもはりゆみ。はの
じめてがつくりかどぐちにかつぱとまろ
ぶものおとは。むねにこたゆる二せのゑん

こゝろときひめはーりいで。みまがふかた
なきむしやぶりの。ヤア三うらさまかとかけ
よつてだきおこさんもおほをのこ 羽コレ
ときひめでござんすと。いへどもしやうき
あらかなしや。せんかたなくまもありあは
すさいはひきつけのどくじんたうそゝぎ

かけたるやくするの、一てき五ざう(ウブシ)にーみ(ねいろ)わたり。(ちいろ)むつくとおきて。はゝびとはいづくに。ヲ、おきがついたかなつかーやとよろ(ろ)、ひにひーとすがりつき。(つゝゝゝ

ときよ～なつて。おしよくはどうじや。アイ
なにさ～あげてもいやとおつしやる。けさ
はやう〳〵かゆのゆをすこうしばかり。ハァ
きゝしにたがわず。それではごほんぶく(ウレイ)お
ぼつかない。サァされどもおきのごじつしや
うなはどくじんとやらのちから。くすりの

～るゝはまのあたり。いまおまへのおきの
ついたも。さていはゝにあたふるくすりで。
せいしんすゞしくなつたるも。おもわず
～らずおやのじひ。ハァもつたいなゝ～〳〵。
おやすみならば。ヱおねが(カヘリ)ほなりとをがまん
とゝはゝもわがみもこれぞこの一せのわか(ヒトヨ　ツユ)

れとおもふにぞさすがのゆうきもをんあひのにくしんわけしはらくと。合

さきだつなみだあないにてものおとびゞかばおどろきたまはんしづかに、

くとこゝろづめてびやうよのくち。

たちよれば　はゝのころ。汐よめぢよ、くく。

うれしやおめがさめましたか。三うらさまがおかへりぞや。よしむらさんじやうつかまつると。あくるへだてをはたとさしヤレこのやうじあけまい。くく。汐そも三うらがかへりとは。さかもとのろへかへりしか。よもこゝへくる三うらではあるま

い。かならずそゝうなことといふまいぞ。よめぢよよゝうきゝや。をつとへいろくびやうゐどのはせんくんのごけにん。ごけのみとなりようせうの三うらをそだてくらすうちうぢさまよりたつてのごしよまう。よりいへこうのきんじゆとなー。いまより二だいのちうしんとのおことばがありがたさにさかもとのじやうちうへごほうこうにまゐらすとき。わらはもとともにとありつれどもゝ。イヤ〳〵せがれ三うらはひとにすぐれてかう〳〵ふかきものなれば。はゝがそばにつきそいゞまさかのときにおやにひかされ。

みれんのこゝろつくときい。かへつておやこがゆみやのなをれと。このまゝこきやうにひきのこり。わかるゝときもくれ〳〵とかならず〳〵おやあるとおもふなよ。はゝがことはわすれても。おしうにちうぎをわするゝな。わつらふとも。しぬるとも。しらせもせぬぞ。たよりもすなと。いひきかーたけうくんをよもやわすりやうやうがない。それにうか〳〵もどつてくる三うらではない。そりやひとちがひ。もゝまたきたがぢやうなれば。けう。かまくらりやうけわけめのだいじのいくさ

せんじやうにむかひながら。さすてきに
うーろをみせるうろたへたーやうねならば
。こではないぞおやでない。ぎ　は、いやまひ
よのなはきかずわがこはいかに。三うら
いてがらしたるかと。ぶつじんにきせいを
かけ。おのれやれはやうーんで。みらいの
をつとにわがこのじまんせんものと。いま
はのたのーみ、こゝろのうれーさ。ぎそのみ
れんなせがれがありさま。なんとをつとに
はなされふ。もはやこのよでかほあはすこ
はもたぬぞ。このかやのうちいは、がじや

うかく。そのおくれたたまーひで。このしろ一トへやぶらるゝなら、やぶつてみよと。ゞ
ゞ
ゞ

うきのおきをもます。ふかうをごめんくだ
されかし。イデせんじやうへかけむかひ
はなばなしきこうめうーて。をつゝけかい
ぢんつかまつらん そのときめでたくごた
いめん おいとまうすとたちいづるといと
きひめあわていだきとめのふこれまつて。
くださんせ。ヰせつかくかほみたかひも
なふ。もふわかるゝといきよくもない。お
やにそむいてこがれたとのご。ふうふのか
ためないうちは。どうやらつんとこゝろが
すまぬ。みじかいサエケなつの一トよさに。
ヰちうぎのかくることもあるまいこれは

どまでにつきしたふ　わたーが　ごゝろ。
おもひ　やつてくれ　もせ　で。　合エケくぬケぬつ　定間
こゝろつよやとひおどし　に　うらむ
らさきの　いろ　ふかき。　河ヲ、せつなるこ
ゝろはさつーたれども。しゆつぢんはのば
されぞ。ふうふとなるはがいぢんのゝち。

しばしのあひだとあひまたれよ。　イエくそれ
でも。　ハテきゝわけなーはなされよと。　ふり
きりくかけいだすを。　まただきとめて。
三うらさま。　河　をつゝけかいぢんとはいつ
はりおまへはこよひうちじにゝゆかーやん
すのであらふがなと。　いふこゑたかーとく

ちにてを。おほへどとまらぬなみだごろ。
イヤ〳〵これがなかずにゐられふか。うちじにのかどでにはしのびのをゝきるときく。ことさらかぶとにめいからうのかほるはかねてのおんものがたり。おもひきつたさいごのおかくご。わたしもおまへにつれそふからい。なんのみれんにとめやせぬ〳〵なぜ〳〵あからさまにうちあけて。このよのゑんはこれかぎりつゝみらいでふうふになつてやろと。ひとことといふてはくださんせぬ。やつぱりてきのむすめじやとうたがふてかいのきこえませぬ。ちゝうへのことはう

ちわすれにつぽんごくにおやといふは。おくにござるはゝさまよりほかにはないとおもふてゐるに。あんまりきつよい三うらさま。おまへをさきだてあとにのめ〳〵いきてゐるゝときひめじやと。合エケねゝ〳〵。ねケねゝ〳〵。おもふてかいのとみをふるはー

つもり〳〵しうさつらさよろひのひざにゆふだちのなみだくみだすごとヲ……くをり。ヲゝよいすゐりやう。いかほどーんせつをつくしても。三うらがうたがひゝはれぬわい。ァノまだわたーにうたがひが。ヲゝはれぬしさいいひきかせん。がそれもゑきな

しもふさらば。イ、ェまたーやんせ。イヤサはなせ。イャなふながふ、とめはせぬ。ゞどのやうにおもふてもァノおやつれなされやう。もうさぎよふおつしやつても。うちじにときゝたまはゞおなげきがおもひやらるゝ。ーこよひ一やはよとぎあそばしヘレおなじことならごりんじうのあとで。ーつゝしんでくつくださんせと。ゝいふも。ねゝなくゝよーむらも。ねゝふぼにうけたるーんたいはつぷ。つゝしにめにつあはでわかるゝかと。ぬつゆきつ。エケヱぬつゝもどりつとつゝをいつ。ろまたも、ろやせきのこゑすればゝつゝこれこそ

こゑのきゝをさめとヲ江㊥つ――おもへ
ばよはる。うしろがみ。ね、――合ねいねえゝ せめ
でしばしいよそながらまんぶん一のおん
こゝろのうちにくるじゆずの・なみ合ゝ――イ、ゝ――
ニ。イ、ゝ――。ヘヤヽヽ
だァ――。合ゝ――しのび

ムエルちルろゝゝへふゞゞゞ。く。ヤ、――
――。合ゝ――ゝ――
すでにユ
のおのづから、みじかよヲ
ふけわたるうしみつつぐるよあらし
のやみをうかゞひたちもどる二にんのつぼ
ね。めいゝ一トこしわきばさみ。みやる
――かたへのすゝきはら。ゐづゝのが

はにかぎなはひかけ。ひたよりつたひかけ
あがるい。　合　イヽンい　汎ヤア　とんだのろくらうど
のシィ。　たかい〳〵。　ひめをうばひかへすこ
とうぎめにおふせつけられたれど。こゝ
ろもとなくよこめのつかひ。　ときまさこう
のおんさーづかねておぼえーゐのびのじゆ

つ。　こまつみちよりはんちやうばかりこの
ゐづゝまできりぬかせ。　ーのびいつたるて
だてのてづかひ。　三うらがこゝにきたりし
はいわしあみでくじらのたいこう。　おんみ
たちはーゆくはづれのでぐち〳〵にばんを
つけ　ひめのあんぴをあひまたれよー　がて

ん〳〵とうなづきあひ　うーろにたちぎくとなりのおくるひとこそきたれなにものとがむるうちにもすかさぬ、みがまへ。

汎ア、れうじなされなおみかたのもの。

ム、みかたといほうばいのじよろ　うか。おするゑかなはなんと。

イヤわたーはけふのやくめをかうむる。あだちとうざがにようほう。おつとにちからをつけんため。とくよりこゝへしのびのをんな。かつておぼへーうらぐちしほう。ごあんないまうーまーよふ。

ム、ハ、〳〵テハ、でかしたく〳〵さいくつきやうコレくつぼねわれにまかしてかうか

うと。いふもいそ〳〵わかるゝつぼね。おくるがあないにとんだのろくらううらぐち、さーて。しのびいる。かくとメしらはをそめかぬるメおもひにまようときもく〳〵ひめにみいつたりとうざぶらう。しりつきこうまのほそめして。おひ

めさまなんとそのままもりがたな。たしかなしやうこでござりませうが。それをーるーにほうでうさまから。おむかひにきたとうざぶらう。ござりませと。てをとれば、ふりはなし。みうらのすけよーむらがつまのときひめ。たとへちゝうへでもてきみ

かた。かたきのいへへなんのかへろふ。むかひのひともあるべきに。なもしらぬ〳〵んざんもの。へんじにおよばぬ。かへれ〳〵。

もしそりやわるいおもひつきじやぞへ。かまくらがたのごひやうぢやうには。さかもとのゝろはをつゝけおちる。おまへのたいせつにおもはしやます三うらさまは。けふあすのうちにくびがころり。そのてはづちやんとしてある。なんぼかあいがらしやつても。くびのないをとこにゝんぢうたつるは。あとのつきのとみのふだをかふやうなものじやぞへ。そんなものより。をとこ

にもつてなにふそくのないとうざぶらう。
ときひめをとりかへしてもどつたればそ
のほうびにはなんぢがにようぼうにつかは
すあひだ。こゝろのまゝにだいてねてたの
しむべしとのごぢやうい。てゝごにきつと
やくそくしてきたからは。ノとのごといふ
はコレこのとうざ。ねこく。トンく　ニ、おまへへのしん
ぢうにつかほにいれほぐろ〳〵てきたわい
なァ河イヤまたうつく〳〵いものでもある
いやでもをうでもかたげてのく　ニーくサアくサヽヽス
おいでとつきまとふ　ニヽねろ河よるなく〳〵する
さんもの。〳〵ゆじんにたい〳〵てりよぐわい

のとが、ときひめがてうちにするぞ。ェ、ィ
さてはおまへはくびのないをとこがすきじ
やな。いかにしもがかんじんじやとて。ど
うばかりをだいてねようとは。どをよくな
ごしんてい。ごめんくといはせもたてず。
かくせしやいばにわつとばかりあたまか

かへてにげてゆく。ときひめせきくるなみ
だながら。ちゝのしるーのほうけんをうち
まもりくる。汃ェ、きこゑぬちゝうへ。こ
のやいばをたまわりしは。三うらさまとゑ
んきるーるしに。はゝさまをころしてかへ
れとあるなんだいは。やいばのいろにあら

はれて。ムねをきりさく〳〵おんたまもの。
〳〵もつともおやのゆるさぬをつと。おもひ
そめた、ふぎのとが。おにくみあるな
らばおてうちにあそばすとも。うらみとは
ぞんじませぬ。をつとをすてゝかへれと
はおな、さけにゝてなさけない。いた
づらものゝせいばいにあのげすげらうのつ
まとなし。せじやうへはぢをみせしめとい。
あまりむごいおんおき。とてもつながる
るゑんじやもの。をつとゝ一よにじがい
せいとおつしやつてくださらば。それこそ
まことのおやのじひ。ヱゝうらめしいちゝう

へさま。つつあすをかぎりのおつとのいのち。
うたがはれてもそはれいでも。おもひき
めたをつといひとり。あのよのゑんを三う
らさまぬケかならずやいのとばかりにてすす
でにじがいと三うらのすけ一つかとおさ
へヤレはやまるまい。

源平盛衰記

松波琵琶之段

道具カヘシ三重

ゆくそらのきのふまであきのくもゐのお
んすまゐも。けふい　さびしきふゆがれ
に。うきめいかねてごらかいのみかど
をおこめたてまつる　とばのりきうのは
いしよののき。きみがゑいりよにしたがふ

い　にはのもみぢばばかり　なり。うき
つれ〴〵のくわんぢよたちひとつところに
もみぢのごゆうのおのうのととともにこちら
もたのしむもの、このほくでんへおしこめ
とはきついせつしやう。わんぱくなきよも
りさまのはからひにて。おみやづかへする
ものはやう〳〵じちよとこちばかり。ほ
んの、はだか、ひやくくわんひやくしさぞ
ごふじゆうにあらふのふ、なにより
のごふじゆうい。このほどよりのとほざか

り。よるのごでんへぎよしなつてにようごさまとしつぽりとあせかこふとのりんげんが。あろふぞいのとうちわらひしばしのうさーをはらーける。ろきもんのくわんじんりやうてをつきしげもりこうよりえいりよをなぐさめんと。まつなみけんぎやうーゆつしなり。とうつたふるあひだもなく。あらすみをのんで。おしとなり。みるしせしもろこーの。よじやうがためーひくつろやむねにいちもつにはさきへ。ひとめくらますゆきつながさぐりさぐりてからんをたよりにのぼるひ

ろゐんさき。たそおとりつぎくだされよ
とーいふにもみぢがさーよつて。ね 汚ノウまつ
なみけんぎやうとはそなたか。ふゆざれの
いとひもなくヲ、たいぎく。さいはひひ
ばちもこゝにある。七あたらつしやれとわる
ざれにーかたへにそつととりのくれば ね 汚
ハゝゝ。たつたいままでこゝにあつたひばち。
わきへなほすとは。コリヤまたゐぢのわる
いことなされますナ。テモがをれ。ろ七
これはとね ありあはをもみぢのえだをさー
つくれば。モろ 汚みるひとも。なくてちりぬる
おくやまの。もみぢはよるの。にーきなり

けりでござりませうがな。ほんにきみようなけんぎやうどのみかどさまのよいおなぐさみ。このとほりそうもんせん。ちとのまそこにとうちつれてつぎのごてんへいまりにけるァ、まうー。どうぞわたくしもごいつしよに。まうー。くこれはさてだうよくな。またたいくつさすのであろふ。ごこしよつとめはァ、これにこまる。とつぶやくをりからこざくらは。ーとやかにひとまをたちいで。けんぎやうどのめしまするそくとうちながめ。ヤァおまへはとゝさま。

〜イコリヤ。あたりみまわし。にぢり(イロ)より。(ハね)汐ヤレ
こざくらか。ァひさしやのふ。かねてまう
〜ふくめしこのたびのたいまう。としはも
、でかいた。ういやつ。(シテ)は、のまつよ
ゆかぬに。ちゝにまさりしたいやく。ヲ、、、
ひはぶじにくらしておゐやるか。ァ、いづれ

のごてんにつとめてをるぞ。(ニ)とゝはれてむ
すめはな(ニねニねニね

ってはかないございご　ざいまし　きよもりにう
たれーとな。ホイ。はつーとばかりにゆきつな
はねーばねーことばもなかりけりこざくら
はねーなみだをおさへ。おかーさまのーなし
やんーたやうすも。このごてんできいたば
かり。もふこれからは。つるともはーらと
もおもふはちゝうへおひとり。もしおか
かさまのやうにみつけられ。ひよんなおわ
かれをせうかと。それがかなーうござりま
す。いひつけられたいちくはわたしがし
ゆびようしおふせませふみとがめられぬ
うちはやういんでくださりませと　を

さなごころのかう〳〵ーん　ふびんとおも
へどころゐあらゝげ。なにをこゝろよわいき
づかひするな。われもただのくらんどゆき
つな。　きよもりめ、しゆくんのあだつ
まのかたき。こよひのうちに。うらみをは
らさん。ーゆくんのためにあひはてーによ

ぼういてがらもの。ないてかへるか。くや
んでかへるか。ア、なくな。　アイ。　なくな。
なくなと。りつぱにいへど　こゝろにい
さすがいもせのわかれのなみだ。そでに
ーくれの　はれまなき。みれんとこゝろと
りなほー。そのーやうねではこゝろもと

ない。コリャおやにふかくをとらするな。アイ。
ようこゝろえてをりまする。シテ。みかど
のござは。アヽ。らうかつゞきのみつけのご
てん。とのゐのぶーは。じちやうばかりで
ござります。フウ、つよー。〳〵。とびそひ
そばなーのをりもをり。もみぢのこのまに
きこゆるひとおと。けどられまじとそらと
ぼけ。おつぼねさま。さやうならごあんな
いをたのみます。サア〳〵ござれとてをとつ
ておくのひとまへいりあひのきゞの。こ
づえもあはれそふ。みねにひゞきしさびー
さを。メこゝにこたふる。ちりづかや合

もみぢのおちばはきよせ〳〵ほうきてんでにじちやうどもみけり〳〵。
さてもやさーやナ――合ほたかひ――をともすへ。ハリヤサ。コリヤサ。ヨイヤサ。コレへいじ。おいらにそうぢふりむけて。
わるいぞよ〳〵。ア、イヤおれもやう〳〵いましまつた。サ、。なんとひとあたりあたろかい。ヲ、さいはひのこのもみぢ。ゑだぶちをりてたきびにせうと。こゝろなきじちやうどもさかりのえだはへーをりふみをり。らくくわらうぜき。合この

はかきよせすりひうち十ほくちにうつせば。
あきのやまメはげーきあらーに（ウタイガヽリ　ニッカンイ、）
ふきつけられ。かんやうきうの。けむりの
なか。（ヤア）とうさくきてあたれとーあーなげ
だしーしりもつたて。（汎ヱ、、、）こゝちよい
は。これでそうみがあたゝまり。とんとさ

むさをわすれた、とだんきをゑしのかゞり
びならで（トンく）さんにん　たきびによねんなく。
はなうたまじりのをりこそあれ。ひとま
をいづるわかばのつぼねーそれとみるより
びつくりし。（汎コレ。）そこなーゆ。だいじの
もみぢをたきびにするとはめつそうな。え

いぶんにたつ〜たら。たいていではあるまいぞや。わがきみさまへこのとほり。まういあげんといひをて、つぼねはおくへいる〜わぐ〜そのところへ。もみぢのつぼねはしろかねのてうちかわらけたづさへて。しとやかにたちいで。汐ノウじちやうどもごちやうあいのもみぢをつてたきびとせしは。らうぜきにてらうぜきにあらず。りんかんにさけをあたゝめ〜こうえふをたくといふ〜のこゝろ。したく〜にはこゝろあ

るものどもとえいかんあり。かんやにはぎ
よいをぬぎしみかどもあり。さぞさむから
んと。きみよりくこんをくださる、。みな
ありがたふおもやいのと。きくよりちんさん
にんいちどうに。よみかへつたるこゝちに
て。おづ〳〵とはいいで。かゝ
おゆるしさへあるに。もつたいない。〳〵。
われ〳〵にごしゆをくださるゝは。ノヲ
またごらう。へいじ。ありがたいとまうー
ませうか。ヘイ。〳〵。よろこうおれいお
つしやつてくださりませと。ひたひをつち
にさんにんがくりく さんぱいきうはいよ

ろこびの。ゑみをふくんでもみぢのつぼ
ね、ほくでんさして。いりにけり。あとに
さんにんためいきつき。河エ、ありがたい
〳〵。どゑらいめにあふかとあんじた
といちがふてかたじけない。マア〳〵いつぱい
のもふ。かんーやとうさく。ヲ、がつてんじ
やと。このはおちばをかきよせ〳〵。
ふ——き——、たーき——つーけー
これをみよ。りんかんにさけをあたゝめこ
うえふをたくとやら。でんじよからおゆる
されたコレてんじやうぬけのさかもりじやァ、
、ハ、ヘ、ヘ、ハ、ヘ、ヘ、アハ、、サア〳〵かんも

よいはとまたごろう。おほかいらけをとり
いだし。これでひとつやらかそふ。マアくと
うさくからハテとーやくにまたごらうはじ
めや。ヲヽとしやくといきよくがない。あり
がたい。くとまちかねやまの。ほとと
ぎす。はつねがおれがきゝざけといつぱい

ひきうけぐつとのむ。サアくとうさくいつは
いけんじやうしんぱいぶりじや。ヲヽそんな
らわれらとちようとつぎ。いきなしにがふ
〳〵。ア、さてゑいい。〳〵。こちらが
のむさけとちがふて。イヤまたかくべつ。ど
うもいへぬ。〳〵。ーたつぐみ。なるはた

きのみ。ひきうけ〳〵。汐とうさく。ちよつとおさえふかいのーからばへいじがあひたそと。さいつさゝれつ　かずがさなりて　汐ところめ　汐なんととうさく。へいじ。かたじけないことじやないか。さつきにはしばりくびもうたりようかとおもふたに。ひいらずをくださるゝとは。このまたごらう。ありがたふて。なみだがこぼれる。わがみたちはなんともないかと。そろ〳〵くだをまきあげー　みすのうちよりこざくらは。おかへてうしとさーいだせば。へいじはとつておーいたゞき　汐これ

はマアくおきつけられてかつじけない。とりわけてござくらさん。としはもゆかぬにおうちのつとめ。ようなされますなァ。マアくこゝでひとあたりなされませと。ムリにこなたへだきおろし。ヲテモさてもじんじやうなうまれつきじやなァ。コレめつたにいろごとせまいぞへ。ヲ、そんなことはしらぬはいの。トたちあがるをいだきとめハテマアあたりいなチンヤコレこざくらさん。いつぞはとをふとおもふていたがさいはひじや。アノおまへのとゝさんのなはなんといふへ。ととはれてはつとあからむかほ。ア、コレ。おまへのと

とさんのなは。たゞのくらんどゆきつなと。
いをふがな。（キメ）イ、エ。アノげんじがたであろ
ふがの。イ、エ。エ、これほどことをわけてい
ふにかくしあがるアノコヽナ。どうばり（チス）めら
う。からいひだしたらこんりんざい。うぬ
がおやのけみやうじつみやう。きゝぬかに

やおかぬのじやと。（ン）はやねぢかゝるはらた
てじやうご。（ウブシ）とうさくはたかわらひハヽ（つゝム）（つゝム）
ー河へいじがしかつめらしいかほをー。
としはもゆかぬことをとらへおとなげないへ
いじや。たーなみやいの。くー。ハー。ヤイく
とうさく。このちつぺいめがてんがゆかぬ

つらがまへ。せんぎするのがなにがをかしい。ハヽヽヽワハヽヽ。ヱヽわらやあがるなをかしうないぞ。サアこせがれぬかさねばしめあぐると。ハイかさにかゝつてゐるのゝしれば〳〵こらへ〳〵しまたごらうわつとばかりにむせかへりねいぬ汐ヱヽむとくしんなへいじ。いかにちうぎじやとて。はくじやうせねばしめころすとは。そりやだうよくといふものじやはいの。〳〵ゞ。コレ〳〵こざくらさん。マアくここへとてをとつて。なみだながらに。ひざすりよせ。ね汐コレ。へいじがどのようにいはふともなんにもこまることはないぞや。ヤ。

マかあいそふにアレみやいのふ。おろ〳〵
してゐるわいの。〳〵ゞ。あのおまへのとゝ
さんのなをいはぬと。いたいめにあはねば
ならぬほどにのう。サアサわしにいふてきか
つしやれ。サたれもきかぬやうに。ちいさ
いこゑでいふてきかつしやれ。ヤ。ヤ。イヽヤ。
そんなことはしらぬわいの。ヲヽく。こゞこ
ろにおやをだいじとかくすのはもつともじ
や。〳〵〳〵。ケケだうりじやわいのハ〳〵ハ〳〵。
なくはく。こりやをかしい。ヤこいつ
はありがたいはい。ハ〳〵。ヱヽはらが
たつ〳〵。あたまだるい。こゝへその

がきひきづつてこいやい。ハテ。そのやうにむがうせいでもせんぎはなることじやはいの。〳〵。なんじやまたなくか。ハ〳〵。ハー。ヲ、おりやまたわれがわらふのでなほかなしい。〳〵と。ケケあられのやうなニなみだをこぼし。ニ。ねニ。ニおケ。ニケる。〳〵。ニるナるニニ。しやくりあぐーれば。たまらぬハ〳〵。へそがよれるとうちこけて。はヤスリアゲらを　かゝへるわらひじやうごケ、なきじやうごニねニねちンなかにへいじがむつとがほ。ムブシ　刈コリヤなにか。わいらはおれがげんじのよるいをせんぎするにじやまするのか。ヲ、おれにまかしてへやでやすめ。たつていぢばるときよ

もりさまへこのとほりまうしあげふか。ハ〜〜そのやうにはらたちやんな。コレまたごらう。へいじがいまのかほみたか。たつていぢばると。きよもりさまへこのとほりまいうしあげふかとケッカル。フハ〜〜ハ〜〜。そのやうにはらたていでも。ゆけならゆくはいの。

ハ〜〜。サァなきどのござれ。とひつたてられなんとこたへもしやうたいなく。そではなみだのぬれつばさぜヽヽヽひ〜〜も合ねんくくなぎさの〜〜〜〜ちーどーりあしなきつわーらーひつつれてゆく。へいじはようしやもあらなはたぐり。にげゆく

こざくらわしづかみ　ぐつとひきよせたか
てこて。　汎サァこれからがこんくらべ。ぬか
しやあがれとたけほうき。ゑんりよゑしや
くもこかひなにぐつと　さしこみ　こぢあ
ぐれば　汎アレエ。　く。じゆつないはいの。
く。くるしくばはくじやうせい。イヽヤ。し

らぬ。しりませぬ。しらずばかうとせめぜ
つてう。　むゝがしらすかまつなみが。ごて
んをくだるにはのおも一さけぶわがこのこ
ゑきいて　おどろくむねもいたゑんさき
汎まうし。　く。どうかきゝます
れば。とゝのゆかぬこをこせつかんなさる

るやうす。マなにごとでござります。とわざとたづぬるこゝろはそゞろ。へいじはそれとしたなめずり(イロ)。汐イヤおけんぎやう。このをんなめがおやはげんじのざんとう。たのくらんどゆきつな。ー(エ)、。イヤサアゆきつなとにらんだめはたがやせぬ。はくじやうせよとせめさいなめど。うかつにぬかさぬどうばりもの。それでかうーていはすのじやと。いうでをがぎりのつゞけうち(ク)うたるゝみよりきく(ク)おやが(ク)こたゆる(ク)つらさはひやくそうばい(ク)。まぶたにそゝぐ(ケ)ちのなみだ(ケ)。こなたはなほも一こゑたかく(ね)。汐サアぬか

しあがらにやぶちころすぞ。イヽエ。たとへ
どのやうなせめにあふても。ーらぬことは
いつまでも。しらぬはいの。しぶといやつ
じやごんせぬかいの。いかさまかたいぢな
うまれしやう。それほどのせめくにあふて
もおやのことばをきつとまもり。わがうぢ
すじやうあかさぬとは。ヲヽしほ(ウレイ)らしい。
ハ〜〜よういひふくめたものじやなァとま
ぎらかす。(一ハモリンろ一ハろ)河イヤナニごぼう。おりやこなさん
にちとむしんがある。ナニてまへにむしんと
はな。ほかでもない。おうちにほうこうは
すれど。ついにこれまでそのびわとやらき

いたことがない。なんと。こゝでちよつと
ひいてきかさんせぬかいの。ヱ、。サそれは。
ひかれまい〳〵。これぱかりはきげんら
しう ハヽヽ。ひかれぬ(ヲス)はづじやて。ソレ。びは
いじよくわしのさくにして。れんしやう
ふよりひのもとにつたはる。じふにりつ

にごいんをわか。ち、ないしんにうれひあ
ればおんりつにあらはるゝ。よすぢのい
とのぜんあくじやしやう。うかつには。へ、。
ひかれまいて(キメ)。いつそこゝへをりて。こ
のこせがれのせんぎしてぐださんせぬか。
ァ、もうー。やくたいもない。びはいまだし

もてなれしわざ。だうよくなげにそのせん
ぎが。どうなるもの。（サァ）そんならいつきよ
くきゝたいと。いやと、いはさぬことばの
かすがひ。（ちン）うちつけにいのぞむいちもつ
まつなみが一、むね（さち）にさゞなみたちさわぐ
びはのこするのてうしぐち（十）みだるゝこゝ
ろしらせまじ、（つゝ、つ——（八）ム、一レ一いモりり）さとられまじと（々。ユレいね。）ぜひなく
も（いねいね）てにとりあぐるびはのねの　しら
べもしどろ　おんあいの　ちすぢ　よすぢ
のいとすぢに　いざやうたはんこれとても
も　うきよはゆめのうつゝとや　さはあれ
どおんあいのうち　こゝろとどまつ、て

はらわたをたち　たましひをうごかさずと
いふことなし　汎ア、ことやさみせ
んとはちがふてかくべつなものじや。ドレこ
のまにまたひとせめ、コリヤめらうめ。ぬか
せ。どうじやぬかさぬか〳〵。ぬかさねば
かうしていいす。じゆつないわいのふ。
〳〵。ケ、かの　しらんのちぎりのたもとには、
かばねをしうたんのほのふにこがすメメぐ
れんのこほりとくることなし　ルくくく戈ヨ、エケねケる二三、
わがこはもくぜんぢごくのせめ。ねいあげつお
ろじついくたびかいいい、もみぢのこぼくはつ
るぎのやま。ろねさケろエさる二二　とりみださじとく

ひしばるむねはな、へのあつごほりとけ
てながる、ゆきつながなみだせきくるたき
つなみひざにふちなす――ばかりなり。
にはよいくるしきいきをつき（イロ）うしおけんぎやうさま。たとへつらいせめ
にあふても。わしやなんぼでもと、さまの
なはいやいたしませぬ。みずしらずのあな
たなれど。ふびんとおもふて。くださりま
せべ。ヲ、ぶーもおよばぬけなげのかくご。
ハレあつぱれなたましひじやなァ。（サァ。）どの
やうにこ、でほめられても。おほかたこ、
でせめころされ。こ、しぬるいのちはおしま

ねど。たつたひとことゝさまにいとま
ごひがしたうございます。かゝさまの
しにめにもゐあはず。せめてひとりのとゝ
さまに。とつくりとあふてしにたいゝなつ
かしい。おやこはいつせのわかれとや
このよであわねばみらいでも。あふこと
ならぬかなしさを。すゐりやうしてたべけ
んぎやうさま。あいたいわいのと。ばか、
りにて。おやはめさきにありながらいは
ずかたらぞいとまごひおさなごゝろのい
ぢらしさ。こらへ〳〵しゆきつなはおもは
ずみはしをまろびをり。ヲ、けなげなでかし

やつた。さぞおやたちがきかれたらうれ～
からふ。〳〵うれしからふといだき
しめ。ちうぎいちづのゆきつなもござうろ
つぷをーぼりだす。ねつてつのなんだはら
〳〵ゆだま。とばしる　ごとくなり。
なげきのゆだんみすまして。ほうきにし
こみーあらみのかたな。ぬくよとみえしい
なづまや。ゆきつな。かくごときりこむへ
いじ。こゝろえたりとみをかはし。わがこ
をこわきにかいこんでぬけつくぐりつひて
うのごとく。かたなたぐつて　ひはらをひ
とあて。うんとたぢろくそのひまにおくに

はさーてかけこんだり。合 へいじはむ
ねんのだいおんじやう。合ヤアくまつなみけん
ぎやうこそげんじのざんとうたゞのくらん
どゆきつなにさうゐなきでうなんばのろく
らうみとゞけたりと。よばはるまもなくゐ
つちうかぎさ、とくよりこれにといぜんの

じちやう。ようゐのどうまるこてすねあて。
ていじやうにかけつくれば。ヤアくかたが
た。合たゞのくらんどゆきつなはもみぢのは
やーへにげこみしぞ。われはみかどをしゆ
ごのやく。ごゆだんあるなとせいするろく
らう。きくよりかけだすにゑんのゆうゑ。

にんずをくばるごてんのそうどうろを
したへとかへしけり

義太夫獨習新書四の卷終

大正九年七月三十日印刷
大正九年八月十三日發行

版權所有

大阪文樂社義太夫研究會編纂

著作兼發行者 大阪市東區船越町二丁目六十一番地 合資會社 大阪文樂社
代表社員 松原助四郎

印刷者 廣島市天神町十七番地 二宮齊美

發行所 大阪市東區船越町二丁目六十一番地 合資會社 大阪文樂社
電話東二一九八番
振替大阪三五二一一番

昭和十三年八月十三日發行
大東文學振興太平洋文化會編纂

昭和十三年八月十五日印刷
大東文學振興太平洋文化會編纂

印刷者　二宮治美
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　大東文學振興太平洋文化會
大東市東淀區阿波座町二丁目六十一番地

發行者　大東文學振興太平洋文化會
大東市東淀區阿波座町二丁目六十一番地

大東文學振興太平洋文化會編纂業